

仙台キリスト教 顛末記

～蘇った支倉常長～



名掛丁東名会 梅津恵一

学生時代に京都で暮した時にお寺の数の多さに驚いたが、仙台に帰ってくるとキリスト教会とミッションスクールの多さが気になり、長年疑問に思っていた。

先日、藤村が仙台の名掛丁で下宿した際に世話をした娘が当時、ミッションスクール仙台女学校に通学していたので詳しく調べようと思い学校に電話をしたところ、教頭先生が対応して下さり、分厚い『仙台白百合学園歴史資料集』を貸して頂いた。残念なことに彼女は中退したのかその足跡はなかった。その代わり、長年の懸案だった疑問の答えが思わぬ展開となってこの本に記してあった。

日本では豊臣秀吉以来、時の権力者達は植民地政策につながる宣教師の布教活動を危惧して、キリスト教を長年禁教としてきた。ところが明治維新後、新政府は徳川幕府が交わした不平等条約を改正するために欧米各国と交渉した際に、国内のキリスト教に対する弾圧を咎められ、明治6年ついにキリシタン禁制の高札を撤去し、布教活動を黙認することとなった。

早速、宣教師達が向かった先は隠れキリシタンが大勢いた長崎と、戊辰戦争後敗軍となって疲弊していた地域、北日本では函館、盛岡、仙台、会津、新潟などであった。この地域は政府が「白河以北一山百文」と称して冷遇したために藩政は崩壊し、失業者があふれ貧困が蔓延していた。

教会は布教活動の重点に医療、教育、孤児の保護をあげている。苦境にあえぐ仙台の人々に各派の教会は救いの手を差し伸べた。その手助けをしたのが函館戦争に従軍して敗れ、往く当ても無くハリストス正教会やカトリック教会の保護を受けて入信した人達だった。また若者の中には新時代に希望を抱き、再起を期して東京や横浜に向った者もいた。

明治4年、布教のために来日したマラン神父は後に「ラテン学校」と呼ばれた私塾を東京に開設し、宿泊費、学費など無料で受け入れていた。日本初の平民宰相となった岩手県出身の原敬もその塾で学んだ一人であった。この塾では仙台と長崎出身者が多かった。それは函館でフランス人宣教師と出会った鈴木亦人や竹内寿貞が仙台の同郷人を積極的に紹介したからであったが、中には昔からキリシタンとの関わりを持った者もいた。多田清介の先祖はキリシタンであったし、窪田敬輔の父親は、支倉常長が洋行して持ち帰った品々を所蔵していた評定所切支丹所の責任者であった。また、河東田剛は、常長一行が乗船したサン・ファン・パウティスタ号の造船奉行河東田縫殿親頭の三男、主馬の子孫であった。

驚いたことに、およそ250年も前に播かれた支倉常長のキリスト教の種が、若者達をラテン学校へと向わせ、そこで洗礼を受けた塾出身者達が仙台の教会設立に尽力した。また他派の教会が布教の拠点の拠点を仙台に置いたことも仙台にキリスト教関連の施設が多くなった理由だった。

それにしても明治時代に支倉常長が再評価されるようになったのは奇縁であった。それは明治政府の欧米視察に端を発していた。明治6年に旅の途中に、一行はイタリアのヴェネツィアの国立文書館で「支倉六右衛門長経」の署名と花押のあるラテン文の書翰が展示されているのを見た。しかし常長がいかなる人物であるのか知るものは誰もいなかった。ところが岩倉具視はそれらに大変興味を抱き、当時接待を受けた同市長ベルセーに関連資料の収集を依頼した。市長はローマ、フローレンス、モデナ、マントバ、ゼノアなどの諸文書館などから関係資料を収集して、明治10年に天皇や政府の要人に献上した。岩倉具視も独自に帰国後、すぐに常長の調査を命じた。その結果、にわかに常長の業績と欧州から持ち帰った遺品が注目を浴び、明治9年に明治天皇が東北地方を巡幸した際には、帰国後200年以上も仙台藩の評定所内切支丹所にお蔵入りしていた品々を閲覧なされた。その後、岩倉具視はそれらを補修し、重要文化遺産として永久保存することを命じた。

支倉常長の持ち帰った品々はその後国宝に指定され、現在は仙台博物館などに保管されている。支倉常長は慶長18年に伊達政宗の命を受けて、イスパニアとローマに通商貿易等の認可を求めて渡航し、イスパニア国王やローマ教皇に謁見したが、目的を果たせず7年後帰国した。ところが当時、徳川幕府は鎖国とキリスト教の禁制を建前としていたために、キリスト教の洗礼を受けてきた彼は業績と共に評価を受ける機会を逸して忘れ去られてしまった。それが明治政府に賊軍の汚名を着せられ仙台藩が消滅して宮城県と名を変えさせられた後に、官軍の将である岩倉具視にその価値を見出されるとは、全くの運命のいたずらかと暫し考えた。ところが日本が世界に窓を閉じていた鎖国時代にヨーロッパ各国は植民地獲得競争をし、またキリスト教が宗教改革により布教活動を国際化した時代の常長の洋行は、目的を果たすことはできなかったが、小国日本の存在を世界に知らしめた。それ故にその評価は官賊の立場を超えた価値を持つ偉業であったと見るべきであろう。

名掛丁で藤村が下宿した三浦屋の窓を開けたらこんな世界史が飛び込んでくるとは思ってもいなかった。

参考文献

『仙台白百合学園歴史資料集 第1編 仙台女学校時代』仙台白百合学園 1996.7

『仙台白百合学園歴史資料集 第2編 仙台高等女学校時代』仙台白百合学園 2014.2

関連資料

『戊辰戦争後の青年武士とキリスト教 仙台藩士・目黒順蔵遺文』目黒 順蔵／著 風濤社 2018.7



支倉常長像
ユネスコ記憶遺産・国宝
仙台市博物館